

## 重度精神薄弱児への人間学的接近（第4報）

— 三たびケイ子と —

村上英治・後藤秀爾<sup>1)</sup>

われとなんじの関係を無限に延長すれば、  
われは永遠のなんじと出会う

— マルチン・ブーバー “孤独と愛” より —

### はじめに

“ひと”と“ひと”との出会いそのものはたしかにそれ自身いわば運命的なものである。

実習に先立っての見学の際、無条件でこの子の人生にかかわってみたいとまで思わせた、無心で、可憐で、可愛らしい一少女とのたまたまの出会い—それが、その実習期間中、自分の担当することにあらかじめ決められていたケイ子自身であったとは。2年前後藤は、愛知県心身障害者コロニーはるひ台学園重度棟の一隅で、こうした無言の暗合とも言える摂理におどろかされる。彼自身のひたぶるのケイ子へののめりこみは、これから始まったといつてよい。

ひとりの“ひと”との“であい”から“とらえ”、“はたらき”をとおして、そして“かかわり”へと。私どもの教育研究実習、期間は、わずか5日という短かく限られたものであるにしろ、こうした取り組みの深化の可能性を、みずから体験する中から学びとることを目指して、これまで4たびにわたるこの種の取り組みに加わった仲間は、その数30名にも及ぼうとする。その中でも、こうした体験を実感として深め、“内なる障害児”としての志向性を明確に見定めえたもの、あるいはいかに志向しようとも、いや志向すればするほどむなしくからまわりに終始してしまったもの、またさらに、かかわる対象となる子のいわゆる張合いのあるなしによって、かかわり手のかかわる満足のありかたの度合のちがいがいなど、その体験の様相は実にさまざまである。しかしいずれの場合にしても、こうした障害の重い子どもたちと出会った、最初の衝撃から、これら5日の取り組みをとおして、ちょうど眼からウロコがぬけおちるように、従来いただいていた障害児観が轟然と音たててくずれ、人間存在

に対する視点に新たなる価値の転換が行なわれてきたことだけは、参加した仲間のなんびとにも共通するものであったと思われる。

後藤とケイ子とのかかわりの体験は、この意味においても、もちろん後藤自身の中に大きな動揺と葛藤、ゆれ動きを実感しながらではあるが、この志向性にそっての展開が、もっとも明確に顕現されたものと考えられる。

実習も年を追うにしたがって、私ども、参加する仲間の顔ぶれもかわっていったし、対象となる子ども自身のいれかえも行なわれた。たとえ2度、3度重ねて、年中行事の如く、毎年夏の終りには、このコロニーやってきたものでも、その実習の年ごとに焦点づけられた取り組みの視点にもとづいて、あるいは、施設を移り、取り組む対象をとりかえられた場合も少なくはない。

その中でひとり、後藤だけは、その最初のケイ子とのかかわりが<第2報>にもくわしく述べたように、あまりにも、啓示的とまでいえるほどであっただけに、このひとりの少女にかかわれる限り、かかわりの体験を積み重ねていくことを、その課題として課せられた。

第2年次にはじまって、その年の彼自身をゆきぶらしめたかかわりの体験が、その深化の過程として、第3年次、第4年次と三たびにわたる取り組みの中で、どのように展開し、そこで、後藤が、どれほどケイ子の内面にはいりこむことができたか、またケイ子の中に、後藤がどのような座を占めるに到ったのか。それはまったく、後藤とケイ子との関係の相互性において、すなわち、後藤だけが成長するものでもない、ケイ子だけが発達するものでもない、まさに両者の関係の発達としてとらえられなければならないといった視座としてあらわになってくる。そしてその視座はその目指すところ、相互の中に深くしみいる関係として、いわゆる“内なる障害児”への志向性をより一層明確化させることとなる。

ある年、あるとき偶然に出会った“ひと”と“ひと”

1) 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士課程学生

との出会い、それが、人間実存の出会いの重みを私たちに問いかける限り、それはただそれだけですでに、人間の生きるという深い意志と関連して、意味深いものであることは、今までの一連の報告の中でも、こうした人間学的接近の基本的路線として、またその具体的症例の提示として、これまで示してきたところである。本報告は、こうした志向性を意図する視点の積み重ねとして、1年ごとの間隔をおいてではあるが、私どもの仲間のひとりの、ひとりの障害児との継時的かかわりの体験を重ねることによって、どのようにそれを深め得たかの一事例の報告にほかならない。以下それら取り組みの視点と、三たびにわたる取り組みの様相を、かかわり手後藤自身によって語らしめることにしたいと考える。

（村上英治）

## 1 3度目の取り組みによせて

### 1-1. 関係の深まりと拡がり

ことしました、ケイ子と取り組むことになった。これで三たびのかかわりとなる。青白くやせていてお腹ばかりが出ていた2年前のケイ子。ずい分と（タテヨコに）大きくなったと、今またケイ子の手を引きながら驚いた。抱き上げようとしてずんと感じて両手に余る2年間の重みがあった。ケイ子のこの成長。

2年前こののにおいに閉口しながらも“この子らの生の意味”について真面目な顔で考えた私が、今は何の抵抗もなく緊張もなく、再会の歓びをごくごく自然に演技しながら、子供達の中へ入って行き、一見無邪気に楽しげに走りまわり、かつ歌い、遊び、かかわりを装ってみせる。保母さんと後輩の前で。それが私の成長？ケイ子の私に対する過去2回の取り組みの成果？

今、ケイ子は私の膝によじ登り、私の口に手をあてて、昨年・一昨年と私が歌った歌を次から次へと歌ってよこす。そして私の歌に身体を揺すって喜びながら、ケナゲニモ耳を傾ける昨年とちっとも変わらないケイ子の姿。「ヘイライディ」「オールザワールド」「オチンチンの歌」「小樽の女」などの私と一緒に歌った歌を実によく覚えているのみならず、この私自身を、私との間に作ってきた関係を、覚えている。ケイ子の方から私の横にハリツITE、一生懸命、「コンパワ、コンパワ」を繰り返す、その喜びを、その思いを私に伝えようと努めているかにみえる。私は一方「ケイ子判ったよ」という事をケイ子に伝えようと一生懸命で、別れる時にも「また来るからね。きっと来るからね。」とケイ子に説明したのだけれど、ケイ子は私の腕をつかんで放さず、とうとう一緒に出口まで連れて来てしまった。……私とケイ

子とのこうしたつながりは何であるのか。

今こうして、ケイ子の成長を感じ、私自身の変化を思うとき、ケイ子と私の間で作りあげてきたもの、育ててきたものが何であったのかを考えてみたいと思う。私の存在はケイ子にとって何であったのか。私にとってケイ子の存在は何であったのか。

たしかにケイ子と私の間の心理的距離は接近している。それが関係の深まりと言えるか。関係の拡がりの基盤たり得ていたか。2度あることは3度あるの類でなく、私の存在がケイ子にとって意味あるものであったという実感をことしてそ欲しいと思う。ケイ子の存在が私にとってどういう意味があったのかを振り返ってみたいと思う。ただし2度あることは3度あるの類ではなく、ほんとうに3度目の正直として考えてみたい。

ケイ子と私の場合に限らず、関係の展開するプロセスは<その深まり>と<それからの拡がり>という2つの次元で概観し得るだろう。ケイ子と私の関係を一緒に深めて行くことが、関係を体験することに対する喜びにまでつながること。それが、おかれた場の中で自分を開き、関係していくことにつながる。関係の拡がりとは、人が自分以外の世界に対して開けて行く過程にほかならない。そして世界に対する新たな関係を深める上に、以前の体験が基礎となるということは容易に想像できることである。こうした深まりと拡がりの展開過程を、私は関係の発達であるとして提起しておきたい。

2人の関係を一緒に深め、拡げて行くことが、私たちの取り組みにおいて志向するものである。とりもなおさず、それは私たちがこうして重度の精神薄弱児と取り組む基本的姿勢であるともいえる。

### 1-2. 関係における発達の相互性

発達とは人間関係が発達することであり、発達のもっとも基礎は人間関係であるということを経験して来たとおりである。人とかかわる喜びを体験し、その関係を深め、拡げようとして行くこと……それこそがまさに発達という現象なのではないだろうか。ひとは、他者との関係の中で、発達し、自己を実現していくものであろう。

そしてそうである以上、人の発達は関係の発達にほかならない。それはかかわりあうものの、たえざる相互作用の展開過程であるとも言える。

私の成長がケイ子の成長を促し、ケイ子の成長が私の成長を促すという、その相互性、一体性を信じて私たちは取り組みをすすめてきた。ケイ子の訴えかけるもの、求めかけるものに耳を傾けてその理解を深めて行くこと

は、私の成長如何にかかわっている。そこで深められた理解は、私からの働きかけのより新たな展開を可能にする。そしてケイ子からの働きかけも新しい側面を加えていく。その中でケイ子の成長をとらえ、成長しつつあるケイ子を感じ、私自身の成長と成長しつつある私を考え、お互いの成長を見つめていくことは、ケイ子と私の関係を発達させ、私達の発達を促していく礎となるものであろう。そう信ずるが故に、ことしました、さらなるお互いの発達を求めてケイ子に取り組もうとしたものである。

かかわり手としての私の側の自己満足に終るようなかかわりの構えを否定してみた2年前。私自身の問題として、私自身の成長として、私とケイ子のかかわりをとらえて行くことに終始してしまうことを否定する気持ちは今も変わっているわけではない。ケイ子とのかかわりの体験を私自身の成長の糧にするという側面を拒否するつもりはない。しかしただそれだけではいけない。それだけならば、それは重度精神薄弱児に取り組む者の自己欺瞞ともなりかねないと思う。だからこそ一層、ケイ子と私の発達の相互性を、ここでとらえなおしておきたいと思うのである。

ケイ子と私とその関係を深め、広げ、相互に成長しあってきたことを示すこと。それがこの小論の意図するところである。それらの意図を具体的に展開する実践例として、この小論を位置づけておきたいと考える。

### 一3. 関係の内側から発達をとらえる視点

ひとりの子どもの人間としての発達をとらえようとするとき、単に現象を分析するにとどまってはならないと考える。現象を解釈することが必要となって来るのである。発達の過程をひとつの連続した流れとしてとらえるためには、したがって流れに沿っての個々の現象を解釈しなくてはならない。このことは関係の発達過程をとらえる時もまた同様である。そしてその解釈はおのずから共存在の人間としてまさに関係を生きている、その関係の中で体験している中で真に可能となるものであろう。こうした立場に立つ時、単に外側から発達をおさえるのではなく、関係の内側から発達をとらえていこうとする視点が生まれて来る。

先にかかげた関係の発達における2つの次元のうち拡がりの次元については外側からの観察によりとらえられる面も少なからずある。が、その拡がりの基盤となったものについては、その基となる体験の当事者でなければ到底理解することは不可能である。深まりの次元についてはより一層それが強調される。関係の深まりとはまさ

に私とこの子との間に生ずる“我一汝”関係での現象であり、主体的意識である。それは、私の内なるこの子、この子の内なる私への展開過程であるが故に、内側からその過程の流れとしてとらえる視点は、このとききわめて重要な不可欠のものとなって来る。

内側から、つまりかかわりの中から関係の発達を解釈していこうとすることは、また、かかわる者がそのかかわりを深めていく上でも重要である。関係の流れをかかわる者自身がそれなりに考え、とらえることは、かかわりの中へみずから入り込み、とけこんでいくことを促すものであろう。そしてそれが、さらなる展開を生んでいく。ここに今ひとつ、こうした視点の生まれる基盤が指摘できる。

## Ⅱ 取り組みの記録（関係の展開過程）

### 一1. 啓示的な出会いから（1年目）

第2報において報告された1年目の取り組み\*は、まさしく私にとって啓示的とも運命的とも言える出会いから始まった。その出会いに単純に感動し、何も判らぬ中でただヤミクモにケイ子に取り組んでいった。そして思いのほか確かなケイ子の反応に喜び、ケイ子の求めるままに、人からはトイレット・ミュージック・セラピーとからかわれたほど、トイレにつきあいつつ歌い、ディールームでは抱いて振りまわし、ケイ子のヤンチャに戸惑いながらも、私の歌を聞くことで楽しんで幸せそうなケイ子を見て満足していた。ケイ子は私の歌をきいて楽しんでいる。そのことが私にとってかかわりが持てたのだという自己満足に直接結びつくことになった。

そうしてのめり込みの1年目が終わった。そんな中で私の意識することのできたのは、私自身が障害児を見るその目の変化であった。その私自身の意識の変革に対する驚きが、2年目もまた私をこの実習に参加させたのである。

### 一2. 困惑とジレンマをおして（2年目）

見学のとき——昨年ともかくかかわり得たという自負と、1年間のブランクという不安と、その相剋の思いをいただいたまま、実習に先立って例年のごとく、今年新しく加わった仲間のための見学についてきた。その時1年ぶりだというのに、ケイ子の方から私の方へ寄ってき

\* この実習参加中、日を追っての取り組みの具体的な展開については、この〈第2報〉にくわしい。したがってこの1年目の経過をここで再録することは省略する。〈第2報〉を参照されたい。

て、小首をかしげて私をたしかめるように「オールザワールド」を歌ってくれた。私を覚えている。この意識が私の昨年の取り組みに対する自負を一段と強めることとなった。

1日目——東山動物園正門。遠足。マイクロバスから降りたケイ子は、待ちうける私をすぐ認めた様子。係長さんに「ホラ、ケイ子の先生よ」と言われて私の横へ。30分で昼食。その間ずっと歌わされる。ケイ子は体をすり寄せて聞き入っている。身体はずっと大きくなって重い。食欲は充分。ただ、相も変わらぬ食事ののろき。最初から最後までベンチのところでパンをいじくりまわしては食べている。パンがなくなれば、パンの袋を指先でくるくるまるめるケイ子得意のあの遊び。そしてうれしそうその表情。

時々私の声に耳を澄まし、ずんと顔をよせて来る。私が見えなくなると、こちらを無表情に見ては時に笑い声をたてる。そしてその子の担当者である私たちの仲間のひとりと何やら女同士の語らいなどをやっている。

時間がきて「もう行くよ」と声をかけると、「ネンネ」とか言ってひっくり返ってしまう。抱き上げて正門へ。

はるひ台へ戻ってもケイ子は寄って来るでもなし。スピーカーから流れて来る音楽に耳を傾けている。私の方はほかの子供のお相手。

食事時に捜すと、1人ポツンと北棟で遊んでいた。私が近寄ると「オールザワールド」と「オチンチンの歌」をミックスしてリクエスト。後者を歌ってやると声をあげて喜ぶ。オフロに入る前、「オチッコ」とか言ってほかの担当者をトイレに連れ込み歌っていた。

2日目——ショップナから困惑、午前中の設定保育で。みんなで本を破っては食べている最中にケイ子と保母さんの姿が忽然と消える。それがケイ子の初潮だったというわけで、何というか……意欲喪失。ハテ。それでも気を取り直して、ケイ子にかかわろうとするが、どこか不自然で、ギゴチなくて、はいり切れない。

昼も半ば過ぎてようやく「夜明けの停車場」にケイ子が反応を示してくれた。そのころになると、私の頭髪をやたらひつつかんで引っぱりまわす。その手をはたいてもはたいても、いっかな止めようとせず。それに加えて夕食の遅さ。最後まで残ってしまった。で、その横ですることもなく歌っている私。

もう精神的肉体的に疲労困憊で、ズラかろうとするが、ケイ子はしっかりしがみついて離れようしない。「また明日ね」と手ぶり身ぶりで説得しても説得されない。また、頭髪をひつつかんでぐいぐい。ああ、人間不信！

3日目——午前中ケイ子はディルム。1人でスピーカーの音楽にあわせて走りまわっている。時々立ち止まってニッと笑う。私が声をかけても耳をかきない。手を差し出すと振り払う。試行錯誤の末、これ以上ケイ子の中へ入ろうという無駄な努力をすることはやめにした。ひる近くなり、ようやく私の歌う「夜明けの停車場」に耳を止めた。私の口元に顔をよせてきて、外部の物音にもかかわらず、私の歌だけを一生懸命きくケイ子。でもそれだけ。

食事が済むと隣の部屋へ入りびたりのケイ子。ママの面会。散歩も水入らず。私が出る幕はない。血は歌よりも濃しか。

ママが居なくなってからも、時折私の側へ寄ってきて……。スチームの後からパンの袋を拾って行く。それを丸めて物思うかに見えるケイ子。同じように紙を丸めて物思う私。

4日目——「ラピオッジャ」「オオソレミオ」「先生」「瀬戸の花嫁」「遠い世界に」「タンタンタスキの……」「しゃれこうべの歌」「サントリービールのCMソング」などなど。比較的他児と遊ぶことの方が多かったが、食事時の歌の延長でケイ子との関係もやや安定的。結局歌うことでしかケイ子とのつながりを作り得ない私である。常に歌のあるところにしか居ようとしなないケイ子。人形を持たせて見てもすぐ他児にとられてトンチャクしないケイ子。興味の限局。

歌がなければかかわれないという状況。だからといって歌オンリーになってはいけないのではとも思う。歌との関係は、あくまでもケイ子の対人関係の拡がりにとっては第1歩でなければと思う。すべてであってはいけない。要するにジレンマ。……アト半日。

5日目——朝のうち中棟。ケイ子の膝枕で好き勝手な歌を歌うこと1時間位。散髪があってディルムへ。ケイ子はまた私の口唇に手をやって歌の要請。少し歌ってケイ子にも同じように要求してやれば少し歌をつなぐ。少しだけ一緒に歌ってみると一瞬ピタリと2人の息が合った。きわめて嬉しそうに笑う私とケイ子。今度の実習、何故かしら今はじめてようやく通じあえたと感ずる。そう思った時には別れの時だった。

2年目を終って——ケイ子と私との関係に関しては低迷していた今年ではあるが、ケイ子自身の成長はいろいろ目についた。第1にはその対人関係の開けてきたこと。去年の記録（学園の担当者による記録）では、基本的にひとり遊びの多い、他者に対する働きかけの少ない子供であった。それが今年の記録を見る限りでも職員に対する甘えが出て来て働きかけが増えている。総体的に

情緒は安定してきている様子であった。

それにもかかわらず、ケイ子と私との関係がすれ違い、ダレてしまったのは何故なのだろうか。私自身の自意識過剰？歌でしかかかわれないという焦り？結局、ケイ子と私の関係においてケイ子を忘れてしまったのではなかろうかと今思う。かかわり手の側からのみ、一方的に関係を無理に展開させることはできない。

### —3. 私の内なるケイ子と、ケイ子の内なる私、その志向性（3年目）

見学のとき——期待どおり私のことをすぐに思い出し、積極的に甘えてくれたケイ子。今度こそは、ケイ子と私のお互いの成長を確認しあい、その関係を本物にしたいと思った。お互いの“内なるもの”を求めてかかわることを自らに課した。“内なるもの”の何たるかもはっきり理解せず。むしろ、理解することを自らの課題にしようと考えた。

1日目——鉄の扉をエッチラコと開けて入れれば左手の中庭にケイ子。スベリ台のソソ。「やあ、ケイ子、ちゃんと来たよ」……と言ってもよそへ走って行って「コンバワ」とかアイサツしている。そののち、ようやく、白け加減の私を認めてやって来て「コンバワ」。で、いきなり「ヘイライディ」のリクエスト。「サーンハーイッ」と。

例によりいつもの歌を次から次へとリクエスト。そしてケイ子の促すままに歌う以外にケイ子とかかわる術を見出し得ない焦燥の私。この歌とリズムの中から徐々に経験を深め、対人関係のバリエーションを……などと邪念を抱き、しきりにケイ子の手をとって足を叩いて身体を揺すってやったりする私。誰のために。何のために。私自身のために。ケイ子のために何かをしてやったのだという自意識のために。……そのケイ子の楽しげなこと。私の膝の上で嬉しげに笑い、身体を揺すって「ヤァ——ヤァ——」と私の歌声にあわせる。「雪が降る」と「希望」を、ケイ子と一緒に歌えて喜ぶ私。

食事中もずっと「ヤァ——ヤァ——」とやって保育さんに叱られるケイ子。そこへ顔を出された係長さんいわく。「ケイ子、シアワセね」。

食後、ケイ子は私をひっぱって北棟へ。そこでデュエット。その2人の関係にはかの子が割ってはいって妨害する。ケイ子へのプロポーズ？そのしつこきさにととうとう逃げ出すケイ子。取り残される私。ま、そのうち私のもとへ戻って来るだろう。

ケイ子のユックリとした食事の様子を見ながらふと思

う。ケイ子の生きる世界は音で一杯の世界なんだろうと。

食後また私の膝によじ登ってリクエスト。一体私は、ケイ子にとって椅子つきのレコードプレーヤー以上の存在なのだろうかと疑問も頭のスミをチラとよぎる。なまじ、ケイ子のためになどとイキゴンデ、かえって自由な動きができなくなってしまった1日だった。

2日目——朝食前に食堂へ。子供達が2・3人寄ってきてウロウロする。ケイ子はさっそく膝の上でリクエスト。なかなかそのままおりようとしな。ベタッと私にくっついて「ヤァ——ヤァ——」。

ディルルーム。ピンポンパン体操にあわせてケイ子の手をひきまわす。ケイ子は最初「ヘイライディ」のリクエストをさかんにしていたが、結局私のペースにはいつてきてリズムにのってピョンピョンはねまわる。それが終わるとベタリと膝の間にはいり込んで他児を寄せつけない。それでも、ひとしきりリクエストが済むと私からフラリと離れて行って、一人で歌っているような。おさらいかしら。リズムに合わせて身を揺すり、職員のところまで両手を使ってセッセッセをして遊んでいるケイ子。時に私のところへ戻って来ると、私の手を引いて人影マバラな中棟へ。

ディルルームでは、セロファンを破っては、くるくるまるめて遊んでいることもある。「ひとつちょうだい」と私が手を出すと、手に持った分をひとつくれる。しばらくそうやってからふたたび中棟でデュエット。満ち足りた時を過ごし……しかしそのあと、夕食へ行くのをその場でひっくり返って拒否するケイ子。「赤トンボ」の歌で腕を組んで立たせれば、ニッと笑って立ち上がり、ピョコピョコ走ってついて来るケイ子。夕食にまた1時間。

食後、トイレでまたもうひとりの担当者に「オーシャンゼリゼ」を歌ってもらっているのを発見。

3日目——私の姿を目にとめるや、ササッと駆け寄って私の腕をとり、唇をスリ寄せたりして、「ヘイライディ」とか「おおおお（雪が降る）」とか歌の催促。食堂へ入るとすぐに私を座らせて、膝の上にもたがって身を揺すって歌に聞きいり、みずから「オオ——オオ——」と歌うケイ子。……40分の朝食。

昼食時。「ゴハンだよ」と言うのと、私の膝の上に乗っていても、すぐに席につくききわけの良さ。

午後フトン敷きのお手伝い。保育さんに誘われて、シートを持って部屋まわり。カーテンひき。あとは私の膝の上でリクエスト。

それからナップサックをしょって散歩。ケイ子と2人

きりでオヤツを食べて（ぶどうを「一粒ちょうだいよ」と遠慮がちにケイ子にたのんで無視されたのだが）、遠まわりをして帰ることにする。私はずっと歌いづめ。ケイ子は右に左に私の腕をとりながら楽しそうに歩いていたが、途中でごねて私の背中へ。で、重いケイ子をおんぶしてようやくのオモイで帰棟。

食後、「ネンネネンネ」というケイ子の要求で中棟へ。ところが歌っているうちに眠くなって膝枕で寝込んでしまったのは私の方だった。ケイ子は30分間、枕元で私の寝顔を小首をかき上げて見つめていたという。

4日目——午前中ベツタリとくっついては離れ、くっついては離れ、をくり返す。

午後ケイ子は行方知れずに。思いあたる節あって中棟へ行ってみればフトンにもぐって私の教えた「ラササヤン」のメロディを口ずさんでいる。私を認めてガバッと起きるやフトンの間へ入れてくれる。で、私の体をつついて歌えとの催促。

夕食が済んでからしばらく知らずにいると、またフトンへはいていた。見に行ったらしばらく歌ってやってからケイ子の寝室へ連行。

5日目——けきましたサッと駆け寄って来てベンチへ。「ポンポコポン」とか「コイビトハ」とか言って歌の催促。かわりに「きょうでおわかれ」を歌ってやると私の唇へ手を持って来て、違う違うと訂正する。

中棟へ誘うのを「ゴハンだから」と押し止めて食卓へ。食堂で歌ってやると私の膝にもたれて「ウーッ ウーッ」とかいう甘えた声を出しながら聞いていた。

午後から私たちとお別れ会。この間あまりベツタリせずに、アッチへ行ったら歌ってもらい、コッチへ行ったら遊んでもらい、私のところへ帰ってきてはペタンとくっついて歌わせて、それからスピーカーの下へ行ったら音楽を聞き、また私のところへ来てペタンとくっついては離れて行く。そんな調子で別離の愁嘆場を演じる必要もなく、バイバイと手を振ってはるひ台に別れを告げた。

3年目を終って——当初の意気込みからみずからの、からまわりを感じ、あらためてケイ子と私の関係を見つめ直すことにより、これで良いのだというユトリのようなものが私の方に生まれて来た。ケイ子の世界の拡がりのめざましきをつぶさに見るにつけ、ケイ子の甘えを素直に受け止めようとする気持ちは自然なものになっていったようである。今年の取り組みの中でケイ子との間に感じた一体感のようなものは、今までのものとは違うように思える。私の存在は、ケイ子の中で、たしかにレコードプレイヤー以上のものがあった。3日目に、私の昼寝を見守るケイ子の中で、よき伴侶としての私一と、いっ

て悪ければ、私に対する関心が、しっかりと根をおろしはじめていたように思う。私に対するケイ子のそうした意識は、私とのかかわりの中から育ってきたものであると考えることは自然ではないだろうか。“ケイ子の内なる私” そんな意識が、その時私の中に浮かんで来た。そして、“私の内なるケイ子”の意識とともに、その後、私はその意識をはっきりと強めていった。

ケイ子の対人関係の拡がりをも、ふたたび見るにつけ、私のやれることはこれまでなのではないかと、思ったりする。ケイ子のケース担当者としての私の役割が、何かしら一段落ついたように感じられる、今の私である。

### Ⅲ まとめと考察

#### —1. 深まりの展開と拡がりの展開

それぞれ1年間の間隔をおいての三たびの取り組みは決して個々にバラバラにしては論じられない。私にとっても、そしてケイ子にとっても、それは一つの連続した流れとしてとらえることができる。以下にその流れを概観してみたい。

まず第一に私とケイ子との関係の流れは一進一退をくりかえしながらの深まりの展開としてとらえることができる。

すでに述べたように、ケイ子と私との出会いはまさに啓示的であった。それは私にとって、実際運命的とさえも言えるものではあったが、それはあくまで、私にとってのことであつたにすぎない。そのことに単純に感動し、ひたすらにケイ子との取り組みにのめり込んでいった私。そしてケイ子の反応があつた。私に対する働きかけがあつた。加えて、私の歌を聞いて実に楽しそうな、幸せそうなケイ子があつた。それを見て私の側に妙な満足感が生じてくることになった。ことさらに、ケイ子との関係の深まりを意識し、私の中にケイ子との一体感を作り出すことになった。5日間の実習が終った時に、ケイ子とかかわることができたという変な自信もあつた。

2年目の見学のときにケイ子が私との関係を覚えていくという私の側の認識は、昨年の取り組みに対する私の自負を助長し、そのことがその年におけるその後の取り組みの中で展開の深まりを決定的に低迷させることになったように思われる。ケイ子が初潮をみたこと、母親面会の時に私から離れていってしまったことなどのキッカケはあつたにせよ、そうした当り前の出来事にショックを受け、意欲喪失に至る過程は、その時私の側に、“ながめ”的な構えがあつたことを抜きには考えられない。

まさに私の側の尊大さ、ゴウマンさ。そしてササイなことに傷つけられた私の自尊心、自負心。そうしたものが、この年の困惑を、ジレンマを決定的なものにして行った。ケイ子と私の関係はすれ違い、ダレていた。ケイ子と私との間に何度か生じ、つきまとう困惑・シラケが、この時特に大きなオチコミとなった。

3年目の始めも、イキゴミとシラケから始まっている。2年目の終りに感じた関係の新たな芽生えは、一面でこのイキゴミにもつながるものではあるが、私に“自然に接すること”の重要性を教えてくれたことで、3年目の展開における深まりに積極的な意義がある。

こうして何度も困惑を体験しながら展開した関係の深まりは、3年目の後半にタイミングよく自然な一体感を感じるまでに到る。ケイ子は私の内にある。私はケイ子の内にある。それは相互に認めあい、相手の存在を尊重し合う関係であると考えたい。

ケイ子と十分に満足いく関係にまで展開できた私。私と納得がいくまで関係を結べたケイ子であろうと3年目の別れにおいて感じた。その意味で心残りのない別れであったといえる。

次にケイ子と私どものほかの仲間、また職員、子どもとの関係の流れは、拡がりの展開として位置付けられる。それは主に私の目を通してのとらえである。

実習以前、ケイ子はひとり遊びの多い、もの静かな子供であった。職員の目からすれば、手のかからない、問題の少ない子であり、つい日頃見過ごされ勝ちになってしまうからという懸念もあり、それらの故に、彼女は私たちの実習のケースに指定されてきたのである。

最初の実習の年には、ほとんど、私との関係を作りながら、その関係から出ていない。実習後、職員に対する甘えが始まる。遊びはひとり遊びになり勝ちであるが、職員に対するケイ子からの働きかけは、お茶とか紙の要求のレベルをこえて増えている。

2年目から、ほかの担当者に例のトイレでの歌を要求するような動きが見られ始める。そして職員との間でも相互の働きかけが通じるようになってきている。3年目の実習では会う人ごとに「コンパワ」とあいさつするケイ子を見て、私の方で驚いた。私以外の大人に対し、さをんに働きかけ、歌ってもらったり、遊んでももらったりもしている。子ども同士での働きかけはまだないが、大人との関係から拡がっていくべきものであろうと思う、ケイ子の場合。

次頁に示されるのは、これらの動きと変化の図式化を試みたものである。

## 一2. 深まりにおける相互性

ケイ子と私とは、おたがいに歌を通じて、歌によってかかわりあって来た。その一点においては、1年目のトイレでのつきあいから、3年目のフトンの上でのつきあいまで、なんら変わることはない。

歌であれ何であれ、とにかくかかわりあえたという私自身の自己満足を追求すれば良かった1年目。それが、歌でしかかかわれないという不満に置き換えられていった2年目。そんな中で、いろいろケイ子に教えられ、歌でのかかわりあいを自然なものとして受け入れることのできるようになっていった3年目。そうした私の側の変化に相応じて、ケイ子の私へのかかわり方も変化してきた。

1年目は、私というジュークボックスを確保しておれば良かった。それがトイレの中でなくてもよいことを理解されはじめたとき、トイレの中での歌の時間は短縮されてきた。ケイ子の要求に、ただ振りまわされることの無意味さを、私の側で意識しての構えの変化にケイ子が応じたものと思われる。2年目の私の、関係からの退避に、ケイ子は1人遊びに没入することで応えた。それ故にやむなく歌での関係へと戻る中でケイ子は、私と一緒に歌うことを覚え始めた。歌によるかかわりあいの中での、ケイ子のこうした変化と、それに対する私のとらえが、新たな関係を展開する基盤ともなったように思われる。

3年目は、共に歌える伴侶としての私の存在がケイ子の中で育っているように思われる。私が、自然な形でケイ子と同じ地平に立つことを志向し、ひとつのキッカケをとらえて、自然な一体感を感じていく過程で、ケイ子の側でも私を、ケイ子自身と共通の、つまり、ケイ子とともに、同じように生きている個人として認めていくようにも思われる。

こうした観点からは、ケイ子と私との関係の深まりは、歌という媒介を得て、はじめて可能となったものであるとも考えられるのである。それは決して、歌にのみ固定されて、身動きのとれなくなったマンネリ関係ではあり得なかった。2年目のジレンマは、たしかに“マンネリ”の意識から生じたものではあったが、歌による関係そのもののマンネリ化ではなかった。したがって、私自身が、“マンネリ”の意識から脱け出すことは、その後の展開の条件となったのではなからうか。関係の深まりは、かかわりあう者のお互いを見る目と、2人の関係を見る目の、成長を基盤とするものにほかならない。

重度精神薄弱児への人間的接近 (第4報)

		深まりの展開			拡がりの展開	
見学 年 日	〔啓示的な出会いから〕	私の認知した 関係の発達過程 〔K⇔G⇔G〕	私の認知した 関係の発達過程 〔K⇔G⇔G〕	私のケイ子への 認知・感情 〔K⇔G〕	私のケイ子との 関係の持ち方 〔K⇔G〕	外界との関係様式 〔K⇔O⇔G〕*
見学 年 日	〔啓示的な出会いから〕	私の認知した 関係の持ち方 〔K⇔G〕	私の認知した 関係の発達過程 〔K⇔G⇔G〕	私のケイ子への 認知・感情 〔K⇔G〕	私のケイ子との 関係の持ち方 〔K⇔G〕	外界との関係様式 〔K⇔O⇔G〕*
見学 年 日	〔啓示的な出会いから〕	私の認知した 関係の持ち方 〔K⇔G〕	私の認知した 関係の発達過程 〔K⇔G⇔G〕	私のケイ子への 認知・感情 〔K⇔G〕	私のケイ子との 関係の持ち方 〔K⇔G〕	外界との関係様式 〔K⇔O⇔G〕*
見学 年 日	〔啓示的な出会いから〕	私の認知した 関係の持ち方 〔K⇔G〕	私の認知した 関係の発達過程 〔K⇔G⇔G〕	私のケイ子への 認知・感情 〔K⇔G〕	私のケイ子との 関係の持ち方 〔K⇔G〕	外界との関係様式 〔K⇔O⇔G〕*

\* K: ケイ子  
G: 私(後藤)  
O: 他者

→: 認知・感情  
⇔: 具体的な行動

\* 内容は、学園の記録より



### 一3. 拡がりの基礎となるもの

私とかかわりのあった2年間のうちに、ケイ子にとって歌の持つ意味あいが変わってきているように考えられる。最初、それは限局された一人遊びの世界そのものであった。歌は単に聴くためのもの、聴いてその中に没入するためのものであったろう。トイレでの私とのつきあいを境にして、次第にケイ子の方から積極的に歌の要求を出すようになっていく。最初は私に対し、そして、ほかの担当者に。2年目では、私に対して要求するのとまったく同じように他者に対しての歌の要求であったように思われる。いわば単純な般化。3年目には、ケイ子にとって、歌は対人接触を求めるための手段ともなっていたようである。アッチコッチで、トイレの折や、遊びの折にリクエストする歌は、外の世界に対して開かれていると言っても良いであろう。こうした新たな外界との関係を求めるケイ子の意識の中では、対人的な視点—外界に対する見方に、質的な転換が認められよう。ちょうど、ケイ子との最初の年のかかわりあい、私の中の障害児観が変容していったように。

こうした変化に併行して、その他の面でも、ケイ子の対人関係は拡がりを見せている。ひとつには、その対象の拡がり、今ひとつには、そのかかわり様式の拡がりである。そのかかわりが、ケイ子にとって快的な体験——快感情をともなったかかわり——にまでなっていることに注目しなくてはならないだろう。かかわりにおける、快的な感情体験。これが、ケイ子における関係の拡がりを動機づけるものであったように思われる。

#### おわりに

子どもが発達するということが、精神薄弱児が発達するということが、そしてその発達をすすめていく上には、それを支えるかかわり手の成長が相伴うべきものであること、その両者の成長・発達は、おたがいがばらばらのものではなく、両者の関係の相互性としてとらえられねばならないこと、それはまた、内側からのとらえとして深化していかなければならないこと、これらの視点は、これまでの報告の中ですでに考察してきたし、また次の〈第5報〉でも“発達するということが”を主題としてまとめていきたいと考える。

本報告では、その種の観点の具体的展開として、後藤によってまとめられた、後藤とケイ子との、1年ごとの間隔をおいての、三たびにわたるかかわりの体験を、“私の内なるケイ子”、“ケイ子の内なる私”を志向する方向で、その変革の過程を内観しながら、後藤自身が考

察をすすめてきた。

私どもの立場に立って、この種の人間学的接近をすすめていく限り、これらの関係の深まりと、その拡がりとは、ただに後藤のケイ子との取り組みにおいてのみ顕現されてくるものではない筈である。こうした志向性をめざす私どもの仲間のひとりびとりに、それは共通するものでなければならないし、より一般化して“ひと”が人間としての成長・発達をすすめていく上に、ある特定のかかわりをもつ、特定の“ひと”との深いつながりが、その“ひと”自身の心の底に安定感をもたせ、より広い社会的関係を、自分のために開かれた世界として受けいれさせる基盤となりうるものではないかと考える。

特に精神薄弱、それも重い障害をもつ子どもたちにとって、彼らは、正常の発達の過程をすすんできた子どもたちとちがって、自分をとりまく、大きな社会の中に、世界の中に、自らを投げ出し、世界内存在としての人間実存をみずから謳いあげていく力に乏しいことはたしかのようである。しかし彼ら自身またみずからが、かけがえのない、歴史的・一回的存在としての規定をもつ人間である限り、それらの道を決してとぎされたものにしてはならないし、それだけにこそ、それにかかわる多くの人たちの力によって、彼らの自己実現の道を支えてやることの必要性は、また今さらあらためて強調するまでもない。

ただそれには発達の芽を育ててやるための道すじがある。施設の中で生きる子どもたちにとって、子どもたち同志の横のつながりや、保母・指導員たちとの関係は、日常生活状況の中でさまざまな様相を示すものではあるが、一般的に、たとえ集団の中で始めから生活し、存在しているということはいえたにしても、こうした内側からのとらえを欠いた療育のありかたのみでは、その内的成長発達の展開を期待するにはきわめて遠いものがあるといわざるを得ない。そうしたときにたとえ一回ごとのかかわりの期間は短かくとも、あるひとりの“ひと”とこれだけ深くかかわりを得たという内的体験、それがまた一回限りにとどまらず、たとえ1年という期間をおいてでも、ふたたび、三たび、深くそのかかわりを重ねたという体験はきわめて貴重なもののように思われる。

もちろん、その志向の方向はたとえ明確であったとしても、それへの道すじは、決して順調なものではないことは、この体験の記録をとおしてもつぶさによみとることができよう。後藤自身、そのかかわりを深めつつある中で、いくたびとまどい、落胆し、空虚感、絶望感を味わったことであろうか。ただそうしたとき、ケイ子の歌をとおしての、世界への開かれは、またまことに興味深い

ものであった。音楽が、歌うということが、いかに“ひと”と“ひと”との間に共感をよびさまし、その底深く、共人間的存在を明証化するものであるかということは、ひろく知られている。歌うことが、こうしてかわる“ひと”のところに深く響き、なごりをとどめ、歌う“ひと”、その歌に耳傾ける“ひと”との間におのずからなるともぶれをひきおこす原動力であると考えられるとき、後藤はまさしく、この歌をとおして、人間存在の意味の深さを、ケイ子とともに謳いあげることに成功したのである。ケイ子なりにせい一ぱい、人間として生きることのよろこびを、歌うことによって表現するとき、何ものにもまして、この子の世界は鮮かに彩られ、また生きるということの根源的意味を新たに賦与してくるのである。〈第3報〉、ひとりの盲精神薄弱児ヤスオと、その5日間、それこそいのちの限り取り組んだ、後

藤かをりが、彼自身の、見えない眼ながらに目みはるその眼の輝きに感動し、せい一ぱい心の叫びとして訴えつづける、そのつぶやきに耳傾けた体験と、それはまったく等質のものと考えてよい。〈第3報〉につづくひとつの症例報告として、ここに一応の考察をすすめた所以である。  
(村上英治)

文 献

- 村上英治・蔭山英順・加藤義男・沼尾孝平・伊藤紀子・赤塚大樹 1970 重度精神薄弱児への人間学的接近（序報）——かかわりの体験をとおして—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），17, 1~19.  
村上英治 1971 重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）——“私の内なる障害児”への志向—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），18, 1~15.

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY  
MENTALLY RETARDED (the 4th report)

— Some Intensive Contacts with Keiko —

Eiji MURAKAMI and Shuji GOTO

This paper is a case report with the same orientation as a series of the humanistic approach to the severely mentally retarded.

The case is Keiko who is one of the severely mentally retarded living in the Haruhidai-Gakuen in the Aich Prefectural Colony. Goto encountered with Keiko for the first time two years ago, and had five-day-contact for three periods in summer seasons.

Through these contacts, Goto could deepen his intensive relationship with Keiko. The purpose of this paper is to report that Keiko and Goto experienced their inner development with each other through their intensive contacts.

To clarify this kind of development of the relation, following several points of view were discussed.

(1) We can experience the deepening and extending of the relationship through these intensive contacts.

(2) On the one hand, as the result of each partner's development, for Keiko and for Goto, the relationship itself develops. On the second hand, each partner's development is made to realize only through the mutual intensive relationship in turn.

(3) Also, we have to apprehend such a kind of development of the relationship as this from the standpoint of the internal frame of reference of each partner in the relation.

Through the contacts of three periods, Keiko and Goto had been really experiencing the deepening of the relation internally, and in parallel with this orientation of deepening, Keiko has learned to contact with her outer world in the institution.

Retrospecting these contacts with Keiko, it appeared for us that the deepening of the relation was based on the development of the cognition about the respective partner and the relationship itself.